

## 館林キリスト教会 デボーションノート（2006年）

8月 1日 今日の通読箇所 創世記34章

「デナ事件」

デナは盛り場かお祭りか、とにかく他部族の女やそのファッションでも見ようとして出かけて行って、とんでもない目に会ったばかりか、両部族を巻き込む大事件を引き起した。本人にそれほどの悪気がなくても、われわれは悪い世に住んでいるのだから、若い娘の軽率な行動などは、いつでも間違いのもとになる。注意しなければならない。さてシケムはデナに対して深い愛着を感じて、父親を通し、ヤコブ家に対して、正式に結婚の交渉を始めた。真に丁寧な口上である。それは良い。しかし本人のデナが帰ってこないのは変だ。縁談の成立を望むあまりに、人質のように押えたのか。あるいはデナもすでにこの結婚を望んでいて、こういう形でシケムに協力したのか。しかし帰ってきた兄たちはこれではおさまらない。遊牧民は他民族と争っては生活できない。しかしまた侮られても生活できない。難しいところだ。とにかく本人を取り返さなければならぬ。また族長の娘を汚されて泣き寝入りはできない。そこでシメオン、レビが先立ちで、ハモル一族に対して苛酷な報復が行われた。その結果、今度は諸民族の報復を恐れる立場になってしまった。

8月 2日 今日の通読箇所 創世記35章

「一族の悔い改め」

ヤコブはデナの軽率も、シメオン、レビの乱暴も押えることができなかった。しかしいま、一族危急存亡の瀬戸際になって、彼の指導のもとにみな悔い改め、神の守護を祈り求めることになった。一体これだけの事件が突然起ったのではない。日頃からの霊的、道徳的なレベル低下が、はしなくも現れたのである。悔い改めに際して、差し出された小さな偶像、また華美かぜいたくか、あるいはまじないにでも関係があるか、同時に提出された耳輪のたぐいなどにもそれが見えている。しかし、いつでも悔い改めるのは、また祈るのは良いことだ。神は祈りに答え、周囲の諸民族に一種の恐怖をお与えになったので、イスラエルを襲撃するものはなかった。またイスラエルも危険を避けてただちに移動したのであった。この事件について、失望と恐れでへり下っているヤコブには、またさきの約束がくりかえし与えられたのである。やがて父イサクが180歳でその生涯を終ると、分れて生活しているエサウとヤコブも、二人で仲よく父のお葬式を執行した。

8月 3日 今日の通読箇所 創世記36章

「エサウの子孫」

ここにはエサウの子孫の系図が出ている。その一族はカナンの南方セイル地方に住んだが、母リベカを通して与えられた約束のとおり、有力な種族となった。31節以下のように、それぞれの族長に支配されるいくつもの支族に分れ、一人の王によって統治される、いわゆるエドム王国となるのである。しかしともすれば、イスラエルと対抗し、時にはイスラエルの進行を妨害し、時には他民族の先棒を担いでイスラエルに侵入し時には反対にイスラエルから手痛い攻撃を受けるなど、前途は悲惨である。キリスト誕生の時、これを殺そうとした悪王ヘロデなども、エドムの出身であった。

8月 4日 今日の通読箇所 創世記37章

「少年ヨセフ」

ヨセフは聖書の中に、失敗や欠点の記述がないので、その意味で完全な人といわれるが、これからそのヨセフの話が始まる。ヤコブは恋女房ラケルの遺児でほとんど末っ子のヨセフを特別に愛した。しかもヨセフは兄弟たちの中で非常に優れた素質を示していたのである。兄の悪い噂を率直に父に話すのは、彼の子供らしい正義感からだろうし、たびたび見る夢は、彼の自信理想の現れだ。しかしこれも放置しておけば、才人特有の高慢でひとりよがり、鼻持ちならぬ人間になってしまう恐れもあったのだ。それゆえ彼の人格の完成のためには、これから見るような、特別に厳しい神のご訓練が大切だった。「嫉妬は骨の腐れなり」と箴言にあるが、兄たちが嫉妬に駆られ、罪もない兄弟ヨセフを殺そうとし、結局奴隷としてイシマエルのキャラバンに売り渡したのは真に恐ろしい悪事だった。

8月 5日 今日の通読箇所 創世記38章

「ユダの失態」

ユダの長男エルは悪い者であったので主に殺され、次兄のオナンも、これまた性的な悪事のために主にうたれて死んだ。ユダ自身も売春婦のつもりで嫁のタマルに戯れ、タマルの方は自分が売春婦になりすまして男を誘ったのだ。ユダ家のありさまは、お話にならない乱脈と言わねばならない。その始りはなにかといえば、最初にユダが異邦人の女を妻に迎えたことにある。「罪の進展は坂道に車を転がすようだ」という。個人も家庭も同じことで、とにかく罪には警戒が大切だ。

8月 6日 今日の通読箇所 創世記39章  
「エジプトのヨセフ」

ヨセフについて、いつも、主が「共におられた」こと、そして主が「彼のわざを栄えさせられた」こと、「恵まれた」ことがくり返し記してある。ゴムまりを水に沈めても、手を離せばすぐ浮き上がる。ヨセフもまた、穴に投げこまれても、奴隷に売られても、神の祝福によってすぐ立ち直るのはすばらしい。しかしポテパルの家で次第に地位を得る間に、こんどはその妻の誘惑にさらされることになった。孤独で愛に飢えた青年にとって、これは最も恐ろしい試みであったが、ヨセフはこれにもうち勝つことができた。ヨセフの、他の何事をも考えず、ただひたすら罪を避けようとする態度は見事だ。これが誘惑に勝つ秘訣であることは、昔も今も変りがない。ヨセフはこのために、かえって牢獄に下るはめに陥ிட்டが、この場合それもやむを得なかった。

8月 7日 今日の通読箇所 創世記40章  
「給仕役の夢」

ヨセフが牢獄の中でも次第に人々に信頼されて、一切を任されるようになったのは、ポテパルの家の場合と変わらず、牢獄でも依然、ヨセフはヨセフだった。ここにエジプト王毒殺の陰謀があり、王の料理役は買収されて毒殺を引き受けた。ところがこれが未然に発覚して関係者が逮捕される間に、身に覚えなき給仕役も、巻きぞえを食って逮捕された。王の誕生日が近づいたので、きっと本式の詮議が始まるだろうという期待から、二人とも夢を見たが、一方が希望的なよい夢を、他の一人が絶望的な苦しい夢を見たのも自然であった。ヨセフは二人の夢の意味を解いてやった。それだけでなく、三日後に死刑になる給仕役に対して、ちょうど十字架上のキリストが死にひんした盗賊を導いたように、彼を悔い改めと信仰と、死後の希望に導いたことと思う。さて間もなく一方は死刑、一方は釈放と、それぞれ彼らの処置はついたが、ヨセフが牢から解放される日はまだこなかった。

8月 8日 今日の通読箇所 創世記41章  
「王の夢」

「すべてのことには時がある」というが、いまやヨセフの忍耐が報いられる時がきた。エジプトの王がある夜、不可解で不気味な夢を見たのがそのチャンスだった。神の摂理は不思議だ。それは人の入りがたい王宮の、とりとめなき王の夢さえも、支配なさることかできるのだ。この王はなかなかりっぱな王だとみえる。国民のために、常に真剣にその平和と繁栄を祈っていればこそ、麦の出来ぐあいや牛の肥えぐあいなど、農家の主人のような夢を見たのだ。さあ翌朝になると、誰にもこの不思議な夢の説明ができないので大騒ぎになった。そこで給仕役は忘れていたあのヨセフのことを思い出したのだ。彼の推薦によ

って牢から出されたヨセフは、神の知恵によって、これが間もなくエジプトにやってくる、全国的な七年の豊作と、七年の不作の夢知らせであることを説明し、問われるままにその対策まで進言した。事態は意外に進展して、ヨセフはここで、はしなくも総理大臣として、エジプトの国政を委任されることとなった。神の祝福によってヨセフが人から信頼されること、何もかも任されることなどの原理は、ポテパルの家でも、牢獄の中でも、エジプトの王宮でも同じだった。

8月 9日 今日に通読箇所 創世記4 2章

「兄弟の対面」

七年の豊作は終り、ヨセフの言葉のとおり、つづく七年の不作の年がやってきた。ヨセフは豊年の間にあり余る麦を粗末にせず、買い占めては穀倉に貯蔵したので、いまは不作に悩む国民にこれを売り渡し、彼らを飢えから救った。諸外国がききんに苦しむ間に、ひとりエジプトのみは、食糧が豊かであった。やがてその噂を聞いて、少しでも食物を分けてもらおうと、外国人までもエジプトに集まってくるようになった。ある日のことである。喧騒を極めた穀物払い下げ所のひとつをヨセフが巡視していると、そこにも沢山の外国人がいて、ヨセフを見ると一斉に平伏する。その中のひとかたまりの人たちを見たとき、ヨセフは驚いて思わず声を立てるところだった。それこそまぎれもない、故郷の兄たちだったのだ。

8月10日 今日に通読箇所 創世記4 3章

「シメオンの留置」

ヨセフはエジプトの総理大臣として、食糧を求めにきた兄たちにはしなくも対面することになったが、このときヨセフには兄たちに対して取りうる、三つの態度があった。一つは復讐することだが、勿論ヨセフにその気持ちはない。では直ちに名乗って兄たちを優遇しようか。それでは彼らは有頂天になって、大切な悔い改めの機会を失うだろう。そこでヨセフは彼らを「スパイだ」と言い立てて厳しく取りあつかった。結局はシメオンのみを留置して、他は帰国させ、今いないベニヤミンをすぐにつれてくれば嫌疑を晴らして解放することになった。困りきった兄たちはヨセフに言葉が分らないと思って「今ここで神は昔の罪を裁かれるのだ」と嘆き合った。彼らは「人の蒔くところは必ずその刈るところとなる」という単純でかつ厳粛な真理を学ばされたのである。それを聞いて感慨に耐えないヨセフが、急ぎ彼らを離れて泣くという場面もあった。帰国の途中で見ると、それぞれの袋には沢山の穀物と、支払ったはずの金も入っているので、彼らはヨセフの真意を計りかねた。

8月11日 今日の通読箇所 創世記44章

「ベニヤミンと対面」

彼らはもう一度エジプトに行くのを恐れたが、もう食糧は尽き、また、いつまでもシメオンをエジプトに置くわけにゆかないので、ベニヤミンを手放すのを渋る父親を説得して、再びエジプトを訪れることになった。

兄たちの陰に隠れるようにして不安らしいベニヤミンを見ると、父母と故郷の思い、少年の日以来の悲しみが一度にこみあげてきて「これがベニヤミンか。父親も元気か」というと、またヨセフは別室に去って泣いたのである。その夜、兄弟揃って豪華版の宴会になったが、いつも末っ子かわいがりの父親がするように、ベニヤミンの前に特別沢山の御馳走が積み上げられたのも驚きだった。だんだん安心して機嫌を直すベニヤミンの姿も、ヨセフにはまた新しい涙の種だったろう。

さてスパイの嫌疑が晴れたので帰郷が許され、彼らはいそいそと出発した。ところが思いがけなく彼らはその夜のキャンプで、追跡してきたエジプトの軍隊に包囲され、嚴重な荷物の検索を受けた。袋の中の十分な食糧、また代金が返してあったのもこの前のおりだが、驚いたことにはベニヤミンの袋から、ヨセフ愛用の銀の杯が出てきたのである。即座にベニヤミンは逮捕される。ほかの者は自由に帰ってもよいということだが兄たちもいっしょにエジプトに引き返す。

報告を聞いたヨセフの怒りは大変なもので、すぐ彼らを面前に引き据えて尋問の末「ベニヤミンのみを処罰する。犯罪に関係のない他の者は帰れ」という事だった。ヨセフはじっと兄たちの様子を見ている。罪もないヨセフを殺そうとした昔の冷酷な兄たちだったら、こんな事情で弟を失うとしても、それはやむを得ないと簡単に諦めてさっさと国に帰るだろう。それとも悔い改めた兄たちは全く別の態度を示すか。

ユダが進み出た。以下の言葉は「ユダの弁論」として有名で、とりなしの祈りの典型と言われる。彼はまず家族の関係を紹介し、ヨセフの事件の時の父の悲しみを話し、いまはその父の心がいかにベニヤミンに堅く結びついているかを語った。「わたしは決して、二度と、父にあの悲しみを味わわせることはできません。弟を見殺しにする悪事を絶対にくりかえしません。わたしは昔の罪の罰を受けます。どうぞわたしを身代りに捕えて、ベニヤミンは父の所へ返してください」と言ったとき、感動のあまり満廷の人々は泣いた。

ヨセフの目にも兄たちがたしかに悔い改めて、今は全く新しい人であることが明かだった。

8月12日 今日の通読箇所 創世記45章

「兄弟の和睦」

ヨセフは「みなすぐこの場を離れよ。わたしたちだけを残して」と叫んだ。急いで退席する人々の耳に、激しいヨセフの泣き声が聞えたのである。

「兄さんたち。わたしはヨセフです。お父さんもまだ元気でうれしい。よく見てください。弟のヨセフですよ」兄たちは口もきけない。「わたしはあなたがたに売られたヨセフです。でも心配しないでください。神さまはわたしたちの家族を、この恐ろしいききんから助けるため、わたしを一足さきにエジプトに送ってくださったのですから。わたしの目の黒い間はもう決してみなさんに不自由はさせません。急いでお父さんをつれてきてください。この豊かなエジプトの地で、家族揃って仲よく暮らしましょう」

ヨセフはこのように、苦難は神の摂理、立身は神の恵み、その立場は家族の救いのためと考えた。

8月13日 今日の通読箇所 創世記46章

「エジプト移住」

子供たちからヨセフの生存や出世の報告を聞くと、父親は驚きで気が遠くなりそうだった。しかしヨセフがヤコブのために用意したりっぱな馬車などを見ると「ああうれしい。生きているうちにまたヨセフに会えるのか」と言って、大急ぎで準備を整えると、ここで一族揃ってエジプトに移住することとなったが、その家族数は七十人だったといわれている。

彼らのエジプト移住はアブラハム以来預言されていた神の摂理だった。彼らはいつもききんに見舞われて食糧が乏しく、小種族の雑居で闘争、動揺の絶えないカナンを離れ、世界一平和で、食糧も生活も豊かなエジプトに住むことを許された。かくて彼らは四百年の間に繁殖し、人口二百万に近い一民族を形成するに至った。しかも最高文明のこの国で、彼らはその貴い使命に耐える教育をも身につけることができたのだ。

8月14日 今日の通読箇所 創世記47章

「旅路の年月」

ヤコブ一家は、エジプトにおいて歓迎を受け、ヨセフの紹介によってエジプト王、パロに拝謁した。そしてエジプトの東端の地域、ゴセンに居住することを許されたのである。

パはこの老族長ヤコブに聞いた。「お元気そうですが、お年はおいくつですか」

「わたしの旅路の年月は七十年です。すぎてみれば短いものですよ。しかもアブラハム、イサクたち先祖にくらべれば、不幸、恥辱のみ多く、はかなくおはずかしい人生でした」

これはヤコブだけでなく、多くの人の感想かも知れません。

8月15日 今日の通読箇所 創世記48章

「生涯の回顧」

「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くごとし」と徳川家康は言ったが、年老いたヤコブがここで回顧しているように、彼の生涯もまたそのとおりだった。

彼は若い時の自負心から兄エサウに負けまいと張りあい、またプライドと物欲から兄と父をだまして、横領同然に全財産を自分の物とした。

しかしやがて兄に命を狙われ家出をする。親戚のラバンを頼ってハランに寄留したが、ずるがしこいらバンに奔弄されて空しく二十年を過ごした。その苦勞の間にめとった恋女房のラケルにも、早く死に別れなければならなかったのだ。愛する末っ子のヨセフとベニヤミンを失なおうとした時の悲しみと不安は彼を一度に老いさせた。そのヤコブの生涯も今は終わろうとしている。そしてすべての人と同じく、墓に入ろうとしているのだ。

8月16日 今日の通読箇所 創世記49章

「ヤコブの遺言」

ヤコブは集まった十二人の子供たちを祝福した。彼らはやがてイスラエルの十二部族を構成するのである。

「兄弟は他人の始まり」などと言うように、同じ親から生まれてもそれぞれ性質が違い、それぞれの長所短所も出てくる。また大人になってくれば、自然各々の利害も相違してくるのだ。「子を見ること親にしかず」で、ヤコブはそれをよく知っていたから、ひとりひとりの上に手をおいて、それぞれまことに適切な祈りを捧げた。彼らと子孫のために祝福と繁栄を、そしてアブラハムに与えられた神の約束の成就を祈っているのは、真にありがたい親心というべきだ。

8月17日 今日の通読箇所 創世記50章

「マクペラの墓地」

ヤコブが死ぬと、ヨセフの取計らいによって、数十日も掛けて、彼の死体にはエジプトの技術による最高の処置が施された。やがてヤコブの家族の他、エジプト王パロの一族や高官たちも加わり、戦車や騎兵をつらねた豪華な葬列を仕立てて、遺体をはるばるカナンまで運び、マクペラの洞窟に葬ったのである。

この洞窟はアブラハムが自分と子孫のために購入しておいた、一族の墓地だった。すでにアブラハムも、その妻サラもここに眠っているのだった。

やがて今度はヨセフが年老いて死を迎える時になると、ヨセフも遺言して、自分の死体もマクペラに葬るように命じたのである。しかしヨセフの遺言には別の言葉も加えられてあった。「やがて神さまの約束が成就すると、我々の子孫はエジプトを出て、カナンに永住するようになるはずです。わたしの体は、その時一緒にカナンに運んでください」ヨセフの死体も丁寧に処置されミイラとして棺に納められ、出エジプトの日までエジプトに留め置かれることになった。エジプトの総理大臣であってもイスラエル人であることを忘れずに、アブラハムに与えられた預言が必ず成就することを、ヨセフはこういう形で確認したのである。

新約聖書週報交読解説文は伊藤英雄牧師、市川こはる副牧師が書きました。

8月18日 今日に通読箇所 マタイ福音書1：1～17

「祝福の基」

今週から、新約聖書の最初、マタイによる福音書を交読することになりました。カタカナの人名が並び、読むことが大変ですが、ゆっくり交読しましょう。ユダヤ人は系図を重んじました。離散しても系図がはっきりしているならユダヤ人と証明できます。そのユダヤ人に、系図を示して、イエス・キリストはユダヤ民族の先祖、信仰の父アブラハムの子孫としてお生まれになったこと、ダビデ王家の子孫としてお生まれになったことを知らせています。聖書には、神様がアブラハムの子孫によって全世界を祝福なさること（創世記12章等）、ダビデの子によって王国を堅くする（サムエル記下7章、詩篇89篇等）とあります。十字架の死と復活によって、信じる者を救い、尽きない祝福を与えて下さるイエス様こそ「祝福の基」なる方、そして永遠の神の国の王でいらっしゃいます。

8月19日 今日に通読箇所 マタイ福音書1：18～25

「罪から救う者」

イエス・キリストの誕生に関して、ルカによる福音書にマリヤの様子が記録されています。ここにはヨセフの様子が記されています。ユダヤの社会で婚約は法律上結婚と同じ意味をもちました。結婚の契約を守らない者には死が定められていました。マリヤのために、ひそかに離縁しようと決心したヨセフに主の使は「胎内に宿っているものは聖霊によるのである」と告げました。23節「おとめがみごもって男の子を産むであろう」とは、旧約聖書イザヤ書のお言葉です。長い間預言されてきた救い主は、時満ちて、聖書の預言のお言葉どおりおとめであるマリヤによって誕生しました。「彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである（21節）」キリストこそ、信じる者の罪を許し永遠の滅びから救ってくださる救い主なのです。

8月20日 今日に通読箇所 マタイ福音書2：1～15

「博士達の礼拝」

日本でもクリスマスを祝う人々が多いが、その真の意味を知って、教会で祈りと感謝を持って迎える人は少ないと思います。このキリストの降誕を伝える聖書記事で印象に残るものの一つは、博士たちをエルサレムへ、そしてベツレヘムに導いた、あの不思議な星のことだと思います。キリストが生まれた頃、遙か東に大国ペルシャがありました。旧約聖書には、エステルというユダヤの娘がこの国の王妃となって、全国のユダヤ人を虐殺から救ったと書いてあります。博士たちは、この国の祭司でした。マジと呼ばれ、医術、占星術、錬金術



に優れ、王の顧問として国政にも参画する、当時の世界で最高のインテリでした。彼らはギリシャ語訳旧約聖書（セプチュアジュント）を読んで、救い主の預言を知り、そこに記された不思議な星の出現を観測したので、預言の成就を確かめ、また救い主にお目にかかるため「千里を遠しとせず」はるばるユダヤにまできたのです。

8月21日 今日に通読箇所 マタイ福音書2：16～23

「幼児虐殺」

フランスの哲学者でキリスト者のパスカルは「パンセ」の中で、マクロビウスの言葉を次のように紹介している。「ヘロデが殺させた二歳以下の子供たちの中に、ヘロデ自身の子供もいたことをローマ皇帝アウグストは知った時にこういった『ヘロデの息子になるよりは、ヘロデの豚になるほうがましだ』と。（ユダヤ人は宗教的な理由から豚を食べない）」。ヘロデは博士たちに幼子が見つかったら押みに行くから知らせてくれるようにと騙した。しかし博士たちは「夢でヘロデのところに帰るなどのみ告げを受けたので、他の道をとって自分の国へ帰って行った」（12節）。ヘロデは博士たちを騙しておいて、自分が騙されたと知った時、狂人と化した。そしてヘロデは「ベツレヘムとその付近の地方とにいる二歳以下の男の子を、ことごとく殺した」（16節）。この幼児たちは、人類の罪を贖うために来られた救い主イエス様の最初の殉教者となった。

8月22日 今日に通読箇所 マタイ福音書3：1～12

「バプテスマのヨハネ」

バプテスマとは洗礼のことです。人々に洗礼を授けた人なのでこう呼ばれています。福音書を書いたヨハネは別の人です。人々はぞくぞくとヨハネのもとに来て自分の罪を告白し洗礼を受けました。ヨハネはある人々に対して特別に厳しい言葉で罪を指摘しました。ヨハネは自分の後においてになる方が聖霊と火によってバプテスマを授け、打ち場の麦をふるい分けなさると告げています。救い主キリスト様は裁き主でもいらっしゃるのです、やがての時、すべての人間をふるい分けなさるのです。消えない火とは永遠の裁きの火です。裁き主であるけれども、永遠の滅びから救ってくださる救い主でもいらっしゃる方がおいでになるので心備えをなさいと教えました。その備えとは、悔い改め、すなわち心も人生の歩みも曲がっているところは、まっすぐにしなさい、そしてキリストを信じ従うように勧めたのです。

8月23日 今日の通読箇所 マタイ福音書3：13～17

「キリストの洗礼」

ヨハネによる福音書には、ヨハネが自分の方に来られるイエス様を見て「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言っています。また「わたしのあとに来るかたは、わたしよりもすぐれたかたである。わたしよりも先におられたからである」とも言っています。神のひとり子イエス様は初めからいらっしゃった神様ですからヨハネはこう言ったのです。長く預言されていた救い主が今おいでくださったのです。イエス様は、罪のない聖い方ですから悔い改めの洗礼をお受けになる必要はありませんでした。しかし「今は受けさせてもらいたい。…すべての正しいことを成就するのは、われわれにふさわしいことである」とおっしゃり、水から上がられると神の御霊がはどのように下り、天から声があり、この方こそ神の子、救い主だと証されたのです。

8月24日 今日の通読箇所 マタイ福音書4：1～11

「荒野の誘惑」

有名なこの「荒野の誘惑」の記事は、イエス様がバプテスマのヨハネから洗礼を受けられた時、天から「これは私の愛する子、わたしの心にかなう者である」の体験と密接に結びついた出来事です。主イエス様は、神の子として、何を語り、何を行い、人々に何を与えるべきかを祈っていたのです。そして御霊に導かれて荒野に行ったのです。そこにはサタンが、キリストの使命を退けさせるために待っていました。ここでキリストは悪魔から「パンの誘惑」「信頼の誘惑」「栄華の誘惑」という三つの誘惑を受けました。悪魔の誘惑に対して、イエス様は三つともみことばを引用して、悪魔の誘惑に勝利されました。これは現代に生きる私たちも倣うべきお手本です。だからエペソ人への手紙6章11節には「悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい」とあり、17節には「御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい」と勧められているのです。

8月25日 今日の通読箇所 マタイ福音書4：12～17

「最初の宣教」

イエス様は荒野における悪魔との戦いに勝利されたあと、なおしばらくは使命に対する準備を整えておられた。そしてその時が来たので、ガリラヤのカペナウムで最初の宣教を開始された。12節に「ヨハネが捕らえられたと聞いて」とある。ヨハネ3：24には「ヨハネはまだ獄に入れられてはいなかった」とあるので、荒野の誘惑のあと、しばらくの時が過ぎていると思われる。ヨハネによる福音書によれば、イエス様は洗礼を受けたあと、ガリラヤのカナの婚礼に出席されており、そのあと過越の祭のためにエルサレムに上って行かれた。13節に「カペナウムに行って住まわれた」とある。当時この町には、ローマ軍が駐屯していた。しかしこの町が記憶に残るのは、イエス様の最初の宣教の地であり、また宣教の拠点だった事である。

8月26日 今日に通読箇所 マタイ福音書4：18～25

「四人の弟子」

イエス様は福音宣教の働きのためにここで四人の人々を招かれました。ガリラヤ湖で漁師をしていたペテロとその兄弟アンデレ、ヤコブとその兄弟ヨハネ。彼らにとってこれがイエス様との初対面ではありませんでした。このヨハネによって書かれたヨハネ福音書を見ますと、前にお会いしていたことがわかります。このときアンデレは兄弟シモンをイエス様に紹介し、イエス様はシモンにペテロという名前を与えておられます。人々が救われるために働くようにと、イエス様がかけてくださった「わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」というお言葉に彼らは今従ったのです。

8月27日 今日に通読箇所 マタイ福音書5：1～16

「山の上の説教」

7章まで続くイエス様のお言葉です。ガリラヤ湖畔の小高い丘でお話くださったとき、そこには弟子たちばかりでなく大勢の群集が集まって聞いていました。イエス様の「さいわいである」というお言葉は「ああ、なんと祝福されていることでしょうか」という感嘆のお言葉で、この幸いについて、「時間の経過、状況の変化によって消滅するはかないこの世の幸福を言っているのではない。悲しみ、苦しみによってもなお消されることなく、この世の何ものによっても取り去られることのない神様の祝福」だと解説されています。この世の価値観でなく、イエス様にある新しい価値観に生きる世界があるのです。

8月28日 今日に通読箇所 マタイ福音書5：17～26

「律法の真意」

「律法」とは簡単に言えば、神様が人間に示された行動の規準です。神様は律法をモーセに示されました。その中心が「十戒」です。けれども人々は、神様の要求を文字の上だけにだけ見て、その深い真意を悟ることが出来ませんでした。例えば、昔からの言い伝えで「殺してはならない」というのがあります。これは十戒の第6番目の戒めで、多くの人々は「自分は人を殺していないのだからこの律法を守っている」と自負していたのです。しかしイエス様は、人々に対して「怒る者」「愚か者という者」「ばか者という者」も、実は律法を守っていないことになるかと教えられたのです。

8月29日 今日に通読箇所 マタイ福音書5：27～37

「心の思い」

イエス様は、人々が旧約聖書の教えを真に理解し神様を信じる者としてふさわしく生きる生き方を教えてくださいました。人々はその教えを聞いて非常に驚きました。律法学者やパリサイ人の教えとは全く違っていたからです。マル

コによる福音書 1 章には人々が新しい教えに驚いた様子が記されています。人々の目には、イエス様は旧約聖書に教えられている神の言葉を捨て去ってしまう人物として映ったかもしれません。しかしそうではなく、イエス様は旧約聖書の教えを真に理解し教えてくださるまことのお方でした。言葉や行動に現れる前に人間の心のうちに存在する考え動機が御心にかなうように、神の言葉、律法を都合よく解釈して離婚を正当化させた当時の人々への指摘、また表面を取り繕う口先だけの誓いも御心ではないことを教えてくださいました。詩篇 19 篇 14 節には「わがあがないぬしなる主よ、どうか、わたしの口の言葉と、心の思いがあなたの前に喜ばれますように。」と祈りの言葉が記されています。

8月30日 今日に通読箇所 マタイ福音書 5 : 38 ~ 48

「天の父のように」

48 節の「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」は、21 節から展開された、律法の正しい理解の結論ともいえる言葉です。パリサイ人のように律法を表面的に守るのではなく、イエス様が教えられたように、その基本精神を守るなら神様の前に完全に達した者と認められるということでしょう。「目には目を、歯には歯を」は他人に害を与えた時に同じもので償わなければならないという賠償の制度でした。それがずれて、やられたらやりかえせ、という復讐の原理になってしまったのです。また「隣り人を愛し、敵を憎め」と言われていたが、旧約聖書には「敵を憎め」という言葉はない。むしろイエス様は正しい理解として「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と教えられた。なぜなら、愛し祈る時、戦いは止み平和が訪れるからです。

8月31日 今日に通読箇所 マタイ福音書 6 : 1 ~ 15

「見せるためでなく」

イエス様は「自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意しなさい。もし、そうしないと、天にいますあなたがたの父から報いを受けることがないであろう」と語りました。これは 2 節以下の施しの問題、5 節以下の祈りの問題、16 節以下の断食の問題全体への序論といえるでしょう。ユダヤ人にとって「義」は最も重要な事で、宗教的には施しと祈りと断食をすることでした。それらは、その人自身の行いであり、神様に対して行うものです。しかし、それがいつの間にか、人に見せるために、人の前で行なわれるようになりました。人に評価されるために行われ、偽善的になってしまったのです。それに対して、イエス様が、人ではなく神様に対して行い、神様に評価されるようにと勧めたのです。これは「義」の正しい意味を回復し、偽善から人々が救われるためです。